

資本論の究極目的（基本思想）

「『この著作の究極目的は近代社会の発展法則（原文では Das ökonomische Bewegungsgesetz ——経済的運動法則）を明らかにすることにある』〔『資本論』第一巻、第一版序文、七～八ページ〕——K・マルクスは彼の『資本論』についてこう述べて、彼の計画を厳格にたもっている」——ミハイロフスキー氏は一八七七年にはこう批評している。それで、この厳格に——この批評家のみとめるところによれば——たもたれた計画を、もっとしさいに検討してみよう。その計画とは、「近代社会の経済的発展法則を明らかにすること」にある。

こういう定式化そのものだけで、すでにわれわれは、解明を要するいくつかの問題に直面させられる。マルクス以前の経済学者がすべて社会一般について論じていたのに、なぜマルクスは「近代（modern）」社会についてかたるとのか？ 彼は「近代的」という言葉をどういう意味でつかい、この近代社会をどういう標識によってべつに取りだしているのか？ ………

これらの問題を解明するために、あらかじめ『資本論』の同じ序文から、もう一カ所引用しておこう。——すぐ数行あとにこう書いてある。

「私の見地は、経済的社会構成体の発展を自然史的過程と見るという点にある。」〔『資本論』第一巻、第一版への序文、八ページ〕

われわれの聞いたところでは、厳格にたもたれてまれに見る論理の力で展開されているという、『資本論』の基本思想が、まさにこの点にあることを知るには、序文から引用したたった二つの箇所を対照してみるだけでも十分である。以上のすべてについて、なによりも二つの事情を注意しておこう。マルクスは、一つの「経済的社会構成体」すなわち資本主義的構成体について述べているだけである。すなわち彼は、この構成体だけの発展法則を研究したのであって、他のどんな構成体の発展法則を研究したのでもない、と言っているのである。これが第一。第二に、マルクスが彼の結論をつくりあげたその方法を注意しておこう。この方法とは、たったいまミハイロフスキー氏から聞いたように、「関係諸事実にたいする綿密な研究」ということだったのである。

さて、『資本論』のこの基本思想の検討にうつろう。この検討は、わが主観主義哲学者があれほど巧妙に回避しようところみたものである。経済的社会構成体という概念は、元来どういうことなのか？ また、こういう構成体の発展は、どういう点で自然史的過程とみなすことができ、また、みなさなければならないのか？——これが、いまわれわれの当面する問題である。私がすでに指摘したように、旧来の（ロシアにとって旧来、だというのではないが）経済学者や社会学者の見地からすれば、経済的社会構成体という概念はまったく無用のものである。彼らは社会一般について論じ、社会一般とはなにか、社会一般の目的および本質はなにか、等々について、スペンサー派と論争している。……………

では、マルクスはどのような方法で、この基本思想をつくりあげたか？ 彼は、社会生活の種々の分野のなかから経済の分野を取りだすことによって、また、あらゆる社会関係のなかから生産関係を、それ以外のすべての関係を規定する基本的な、本源的なものとして取りだすことによって、それをおこなったのである。マルクス自身、この問題について

の彼の考察の道すじを、つぎのように言っている。

「私をなやました疑問の解決のためにくわだてた最初の仕事は、ヘーゲル法哲学の批判的検討であった。……私の研究はつぎのような結果に到達した。すなわち、法関係ならびに国家形態というものは、それ自体からも、また、いわゆる人間精神の一般的発展からも、理解されうるものではなく、むしろそれらは、物質的な生活諸関係——それらの総体を、ヘーゲルは十八世紀のイギリス人とフランス人の先例にならって『市民社会』という名称のもとに総括している——に根底をもっているということ、だが、この市民社会の解剖はこれを経済学のうちにもとめるべきである、ということであった。……私が（経済学の研究によって）到達した……一般的結論は、簡単につぎのように定式化することができる。人間はその生命の社会的生産において、一定の必然的な、彼らの意志から独立した関係、**生産関係**にはいる。この生産関係は、彼らの物質的な生産力の一定の発展段階に照応する。これらの生産関係の総体は、社会の経済的構造を形づくる。これらが現実の土台であって、そのうえに法律のおよび、政治的な上部構造が立ち、そして、それに一定の社会的意識諸形態が照応する。物質的な生命の生産様式が、社会的・政治的・精神的な生活過程一般を条件づける。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなくて、逆に、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的な生産力は、その発展のある段階で、この生産力が従来その内部ではたらいてきた現存の生産関係と、あるいは、同じことの法律的表現にすぎないが、所有関係と矛盾するようになる。これらの関係は、生産力の発展のための形態から、その桎梏にかわる。このとき社会革命の時代がはじまる。経済的基礎が変化するとともに、巨大な全上部構造が、あるいは徐々に、あるいは急速に変革される。このような変革を考察するさいには、自然科学の正確さで確認できる経済的生産条件における物質的な変革と、人間がこの衝突を意識し、かつ、たたかいぬく法律的・政治的・宗教的・芸術的あるいは哲学的な、つまりイデオロギー的な諸形態とを、つねに区別しなければならない。ある個人の人物を、その個人が自分をどう考えているかによって判断しないのと同じように、このような変革時代を、その時代の意識から判断することはできないのであって、むしろこの意識を、物質的な生活の諸矛盾から、社会的生産力と生産関係とのあいだに現存する衝突から説明しなければならない。……

大づかみに言って、経済的社会構成体のあいつぐ諸時代として、アジア的・古代的・封建的・近代ブルジョア的の諸生産様式をあげることができる。」〔『経済学批判』序文。補巻3、二～四ページ、ゴシックはレーニン〕

社会学における唯物論のこの思想は、すでにそれ自体で天才的な思想であった。もちろん、さしあたっては、これはまだ仮説にすぎなかったが、しかし、仮説にしても、それは、歴史上および社会上の諸問題にたいして厳密に科学的な態度をとる可能性を、はじめてつくりだしたものであった。いままでは社会学者たちは、もっとも単純な関係、生産関係というような本源的な関係にまで掘りさげていくことができないで、じかに政治的＝法律的形態の考究や研究にとりかかり、これらの形態がその時代における人間のあれこれの観念から発生したという事実につづき、——そして、そこにとどまっていた。そこで社会関係は、人間が意識的につくりあげるものようになっていたのである。しかし、**Contrat Social**〔社会契約説〕の思想に完全に表現されたこの結論は（この説の痕跡は、空想的社会主義のあらゆる体系のなかにきわめて顕著にみとめられる）、あらゆる歴史上の観察に

まったく矛盾するものであった。社会の成員が、そのなかに自分が生活している社会関係の総体を、なんらかの原理によってつらぬかれた、なにか確定的な、全一的なものと考えたことは、かつて一度もなかったし、いまでもない。反対に、大衆はこの社会関係に無意識に順応するのであって、それが特殊の歴史的な社会関係だという考えはほとんどもたず、そこで、たとえば、幾世紀ものあいだ人間がそのなかに生活してきた交換関係の説明が、やっごく最近になってあたえられたくらいである。唯物論は、いっそうふかく、人間のこれらの社会的観念そのものの起源にまで、分析をつづけていくことによって、この矛盾を除去した。そして、観念の行程は事物の行程に依存するという唯物論の結論だけが、科学的心理学と両立しうるのである。さらに、この仮説はまた、べつの方面からも、社会学をはじめて科学の水準を高めた。いままでは、社会学者たちは、社会現象の錯綜した網のなかで、重要な現象と重要でない現象とを区別することに困難を感じ（これが社会学における主観主義の根源である）、これを分界するための客観的な基準を見いだすことができないでいた。唯物論は、「生産関係」を社会の構造として取りだし、この生産関係に反復性という一般科学的な基準を適用できるようにしたことで、完全に客観的な基準をあたえた。ところで、この反復性の基準が社会学に適用できるということは、主観主義者たちが否定してきたところである。彼らがイデオロギー的な社会関係（すなわち、形成されるまえに人間の意識〔というのは、もちろん、つねに社会関係の意識だけを問題にしているのも、その他の関係の意識をではない。〕を通過する関係）にとどまっていたあいだは、彼らはさまざまな国の社会現象における反復性と規則性とをみとめることができず、彼らの科学は、せいぜいこれらの現象の記述と素材の収集にすぎなかった。物質的社会関係（すなわち、人間の意識を通過しないで形成される関係、——人間は生産物を交換することによって生産関係にはいりこむが、ここに社会的生産関係があることを意識さえしないで、そうするのである）を分析することによって、反復性と規則性とをみとめて、さまざまな国の制度を**社会構成体**という一つの基本概念に概括することが、一挙に可能になった。このような概括だけが、社会現象の記述（および理想の見地からする評価）から、これらの現象の厳密に科学的な分析にうつることを可能にしたのである。

この科学的分析は、一例をあげれば、一つの資本主義国をべつの資本主義国から区別するところのものを取りさって、それらすべてに共通するものを研究するのである。

最後に、第三に、この仮説がはじめて**科学的社会学**の可能性をつくりだしたという、もう一つの理由は、社会関係を生産関係に還元し、そして、この生産関係を生産力の水準に還元することだけが、社会構成体の発展を自然史的過程として考えるための強固な基礎をあたえたからである。だが、このような見解なしには社会科学もまたありえないことは、自明である。（たとえば、主観主義者は、歴史現象の法則性をみとめながらも、歴史現象の進化を自然史的過程として見ることはできなかった。——その理由は、まさに、彼らが社会的観念や人類の目的にとどまっていて、これらの観念や目的を物質的社会関係に還元することができなかったからである。）

ところで、マルクスは、一八四〇年代にこの仮説を述べてから、材料の事實的（このことに注意せよ）研究にとりかかっている。彼は一つの**経済的社会構成体**——商品経済制度——をとって、膨大な資料にもとづいて（この資料を彼は二五年以上も研究したのだ）、この構成体の機能と発展との法則のきわめて詳細な分析をあたえている。この分析は、社

会の成員間の生産関係だけに限定されている。マルクスは、問題の説明のために一度もこの生産関係の外部にあるなにかの要因にたよることなしに、社会経済の商品的組織がどのようにして発展するか、その組織がどのようにして資本主義的組織に転化し、ブルジョアジーとプロレタリアートという敵対的な（すでに生産関係の範囲内で）階級をつくりだすか、その組織は、どのようにして社会的労働の生産性を発展させ、そして、まさにそのことによって、この資本主義的組織そのものの基礎と和解しえないまでに矛盾するようになる一要素をもちこむか、ということを知る可能性をあたえ——ている。

これが『資本論』の骨組みである。だが、重要な点は、マルクスがこの骨組みだけでは満足しなかったこと、彼が普通の意味での「経済理論」だけにとどまらなかったこと、彼が——ある社会構成体の構造と発展とをもっぱら生産関係によって説明しながらも——それにもかかわらず、この生産関係に照応する上部構造を、つねに、そして、いたるところで追及し、この骨組みを肉と血でつつんだことにある。このためにこそ『資本論』はきわめて巨大な成功をおさめたのであって、そこで「ドイツの経済学者」のこの著書は、資本主義的社会構成体の全休を、生きた構成体として——すなわち、日常生活の諸側面や、この生産関係に固有な階級敵対の実際上の社会的現れや、資本家階級の支配を保護するブルジョア的な政治的上部構造や、自由・平等、等々のブルジョアの観念や、ブルジョアの家族関係をともなった構成体として——読者にしめしたのである。ダーウィンと比較することがまったく当をえていることは、いまや明白である。『資本論』——これはまさに、「モン・ブラン山ともいふべき多量の事実資料に仕上げをあたえる、いくつかの、相互にきわめて密接に関連した、概括的な観念」にほかならない。そして、もしだれかが『資本論』を読んで、この概括的な観念に気づかなかつたとしても、それは、もはやマルクスの罪ではない。彼は、さきに見たように、序文のなかでさえ、これらの観念について指摘しているのである。そればかりではない。ダーウィンとの比較は、たんに外的な面から正しいばかりでなく（なぜこの面がミハイロフスキー氏の特別の関心を引くかは不明であるが）、内的な面からも正しい。ダーウィンは、動植物の種を、なんら関連のない、偶然的な、「神によって創造された」、不変のものと見る見解に終止符を打ち、また、種の可変性と種相互の継承性を確定して、はじめて生物学を完全に科学的な基盤のうえにすえたが、これと同じように、マルクスは社会を、当局者の意志によって（あるいは同じことだが、社会や政府の意志によって）どうにでも変わりうる、偶然に生起し、また変化する、個々人の機械的な集合体と見る見解に終止符を打ち、また、経済的社会構成体という概念を当該の生産関係の総体として確定し、このような構成体の発展が自然史的過程であることを確定して、はじめて社会学を科学的な基盤のうえにすえたのである。

いまでは——『資本論』が出現してからは——、唯物史観はもう仮説ではなくて、科学的に証明済みの命題である。そして、なんなかの社会構成体の機能と発展——まさに社会構成体のそれであつて、なんらかの国、あるいは国民、あるいは階級、等々でさえもの生活様式のそれではない——を科学的に説明する、他の試みがなされないあいだは——すなわち、唯物論がなしとげたのとまったく同じように「関係諸事実」を秩序だてることができ、それとまったく同じように、一定の構成体を厳密に科学的に説明しながら、その生きた描写をあたえることができるような、他の試みがなされないあいだは——そのときまでは、唯物史観は社会科学と同義語であろう。唯物論は、ミハイロフスキー氏が考えてい

るように「大体において科学的な歴史観」ではなくて、唯一の科学的な歴史観なのである。

第一巻「人民の友」とはなにか P128~135 1894年春～夏

〈コメント〉

資本論の究極目的

経済的社会構成体の発展を自然史的過程と見て（基本思想）、近代社会の経済的運動法則を明らかにすることが「資本論」の究極目的。

このためにマルクスは

- ①近代社会の「経済的社会構成体」である資本主義的構成体の発展法則だけを研究した。
- ②「関係諸事実に対する綿密な研究」によって結論を得た。仮説が科学になった。

マルクスによって「社会学」を科学にしたもの

- ①唯物論によるものの見方……観念の行程は事物の行程に依存するという唯物論の結論
- ②社会の構造としての「生産関係」を取り出し、この生産関係に客観的基準をあたえることにより、現代の様々な国の制度を資本主義制度という一つの基本概念に概括（一般化）することを可能にした。）した。
- ③社会関係を生産関係に還元し、そして、この生産関係を生産力の水準に還元した。これにより、唯物史観を論証（発見）した。

史的唯物論のポイント

- ①生産力の水準が生産関係を決め、この生産関係が社会構成体のあり方を決める。
- ②この社会構成体のあり方が人間の観念を形成し、人間社会の上部構造をつくる。